

藤田 今では受け入れていますがね。そういえば、岡さんはロビーに展示パネルも作ったんですね。

岡 ええ、ビオトープやトンボ調査のことを書いて、写真も入れたパネルを展示しています。

大川 あの入口のスペースは商談スペースにもなっているのですが、お客様からも「マツダさんはこんな取り組みもされているんですね！」と反応を得ており、マツダのCSRの取り組みを伝えるのにも役立っています。

岡 パネルの内容は社内限定のネット掲示板にも「横浜CSR活動 トンボの池で地域をつなぐ」として掲載しています。これは反響が大きかった。特に広島の本社から「素晴らしい取り組みだ、もっとこの輪を広げてがんばってください」という感想や激励メールをたくさんもらいました。

藤田 昨年は生きものの観察会も行いましたね。フォーラムのメンバーであり「あおぞら自然共育舎」の代表でもある早川広美さんに講師となっていたとき、小学生のいる社員の家族、友達家族を対象に合計5家族15名で盛況でした。

岡 生きものの観察会で「京浜の森づくり」にたくさんさんの臨海部の企業が参加していて、それをトンボがつないでいると話をしてらみなさんすごく興味を持って「ただトンボがいる池とただ池じゃないんですね」と、主旨を理解してもらえたんです。

でもまだまだ伝え切れない人たちも多いので、これからも広報していきたいですね。



また、2016年は学生さんたちが週2回調査にくるようになったので、社員が目にする機会も多くなり、さらに認知が高まったと感じています。

ビオトープに求めるものは？

学生 ビオトープが社員の方に少しずつ認められていると聞いてうれしです。社内ではビオトープをどんな存在と捉えているのでしょうか。

岡 1つは仕事の合間の「癒やし」「憩い」になればいいなと思っています。

藤田 私は開発の部署にありますが、製品づくりのアイデアを考えるのに静かな空間と時間が欲しい、大切だという意見を聞きますね。ビオトープはそれに応える環境になれるんじゃないでしょうか。

それに、デザイナーって、たとえば一番足が速いチャーターから車のデザインのヒントを得たりするので、トンボもそんな目で見るのかも知れないですね。車は空を飛ばないけれど(笑)。

大川 トンボは調査や観察会で地域とこの場所をつないでくれています。京浜臨海地区にも自然があるんだよということを地域の人びとにもっと知ってもらいたいですね。小学生親子を集めて環境フォーラムのようなもの恒例イベントのようにできたらいいなと思っています。

トンボを通して、京浜臨海地区の里山環境を作るところまでいけたらいいですね。

トンボ調査によっていいことがありましたか？

学生 トンボ調査によってビオトープができ、社内の環境意識の高まりがうまれたことがよく分かりました。

そのほかにも、調査に参加したことになにかよかったことがありますか？

大川 2016年9月、マツダはISO14001(環境マネジメントシステムの仕様を定める国際規格)を取得しました。R&Dセンターにも外部審査員が来られたのですが、真っ先にビオトープに着目し、評価してくれたことがうれ

しかったです。認証取得の一助になったのではと思っています。

学生 ありがとうございます。学生部会での調査はまだ続きますので、これからもお世話になります。よろしく願います。

トンボは広島本社の意識も変えた！

マツダの本社がある広島は、自然豊かな地であるため、わざわざ観察しなくてもトンボだらけ。だから逆にトンボを意識していなかったのですが、横浜からの報告を聞いて改めてトンボに目を向ける社員が増えてきたそうです。

世界文化遺産にも登録されている宮島には、宮島と香港にしか棲息していない「ミヤジマトンボ」がおり、トンボが話題になったことでミヤジマトンボを知っている社員がたくさんいることも分かりました。

生きものの観察会の際、広島から一人の学生がアシスタントとしてやってきました。彼女は生物科学を専攻していて、マツダ本社にインターンに来ていたのです。実習のメニューの中から横浜の取り組みを聞いて「行きたい」と手を挙げたとのこと。

「環境と車は相反すると思われていて、周囲からなぜマツダをインターン先に選んだのかと言われたりもしましたが、横浜での実習を通して『真剣に地球環境問題を考えている会社だ』と実感できました」という感想を寄せてくれました。

